

子どもの外遊びに影響を与える要因とその関係性に関する研究 ～高知市の小学校を事例として

渡辺 大翔
指導教員 土屋 哲

研究背景

近年、子どもの外遊びの減少により、体力の低下や社会性の発達への影響が懸念されている。先行研究では、スクリーンタイムの増加、習い事の高頻度化、保護者の安全志向などが外遊びに影響を与える主な要因として指摘されている。しかし、これらの要因は個別に扱われることが多く、要因同士の相互作用に着目した実証研究は十分とはいえない。

研究目的

本研究の目的は、子どもの外遊び日数および外遊び時間に対して、スクリーンタイム、習い事の頻度、保護者の安全志向がどのような影響を及ぼすのかを数量的に明らかにするとともに、要因同士の相互作用効果を検証することで、外遊び減少の構造を明らかにすることである。

研究方法

高知市内の小学校に在籍する3年生以上の児童を対象に、無記名式質問紙調査を実施した。従属変数は外遊び日数および外遊び時間、独立変数はスクリーンタイム、習い事の頻度、保護者の安全志向とした。保護者の安全志向は複数設問を合成した尺度を用いた。分析には重回帰分析を用い、さらに各要因を高低群に二分し、交互作用項を含めた分析を行った。

分析結果

分析の結果、保護者の安全志向は外遊び日数および外遊び時間の双方に対して有意な負の影響を示した。一方、スクリーンタイムは外遊び日数・時間に対して正の影響を示し、必ずしも外遊びと競合する関係にはないことが示唆された。習い事の頻度は主効果としては有意ではなかったが、相互作用分析において「スクリーンタイム×習い事の頻度」は正で有意、「習い事の頻度×保護者の安全志向」は負で有意となった。

考察・結論

分析結果から、子どもの外遊び減少は単一の要因によるものではなく、複数の要因の組み合わせによって強化される構造を持ちうることが明らかとなった。特に、保護者の安全志向は外遊びを抑制する中心的要因であり、習い事の多さと重なることでその影響がより顕著になることが示された。